

平成29年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

小曾木日原堀のカツラの木

小曾木市民センターから南へ進み、八雲神社の西側を回り込むと広い水田跡地の谷津が奥の方まで続いています。ここは日原堀と呼ばれ、左岸沿いの山道は、昔は南小曾木荒田から天寧寺尾根を通して根ヶ布につながる交通路として使われていました。田んぼの耕作が放棄されてから既に50年位は経っていると思われますが、田んぼの跡は湿地状態で奥の方まで続いています。

この中程の右岸側に1本のカツラの木があります。胸高直径56cm（幹周り177cm）の太い木で、樹高は約18mです。地上から160cmの高さで3本に枝分かれしています。左岸沿いの道からも目立つ木です。

昔の水田面よりもちょっと高い位置に生えているので、田んぼの作業の合間には、この木の木陰で一服したのかとも想像されます。

カツラは山地の溪谷沿いに自生する樹木で、真夏の一時期と秋の黄葉から落葉にかけての時期に、醤油のような香りを発するので「しょうゆの木」と呼ぶ地方もあります。また、葉を乾して粉にして抹香の材料としたことから「こうの木」との方言もあります。

青梅市では御岳山の綾広の滝近くにある「お浜の桂」が有名です。しかし、標高約170mのこのような低い地にカツラの木があるのは珍しいことです。

黒沢谷では、これまでも黒沢のトチノキ、小曾木のイヌブナ、富岡のツガのように、何でこんな標高の低い場所にあるんだろうという山地性の樹木が確認されています。氷河期に標高の低い場所まで分布を広げていた樹木は、氷河期が終わり暖くなると北へ、または山地へと分布を変えますが、この時に遺存的に残ったのではとも推測されています。黒沢谷には、温暖化が進む中でも山地性（冷温帯）の樹木が残る要因があったのかもしれない。

日原堀のカツラもこれと同様と考えることもできますが、植栽されたのではとの疑念も残ります。このカツラの木由来をご存じの方がいましたら、お教えいただければ幸いです。

（文責 久保田繁男）